

# 大学の中の反乱

クリス・ヘッジズ

コンソーシアム・ニュース 2024 年 04 月 28 日

<https://consortiumnews.com/2024/04/25/chris-hedges-revolt-in-the-universities/>

**大量逮捕と停学、立ち退き、追放に直面している全国の大学生こそ、ガザでの虐殺を阻止するための最後の、そして最大の希望だ。**

プリンストン大学で公共問題を専攻する大学院生のアヒンティア・シヴァリンガムさんは、立ち退きを命じられ、キャンパスへの立ち入りを禁止された。

「ガザでの大量虐殺に抗議したために逮捕されました。同じような境遇の全米の数百人の学生たちに、私も加わることになるとは思いませんでした」。

彼女はブルーのスウェットを着て、ときおり涙をこらえながら、私が話しかけると、こう語った。

私たちはウィザースプーン通りにあるスモール・ワールド・コーヒー店の小さなテーブルに座っている。そこは、それは、彼女がもう入れなくなってしまった大学から、もう住むことのできなくなってしまった学生会館から、そして数週間後に卒業を予定していたキャンパスから、半ブロック離れた場所である。

**彼女はいま、どこで一夜を過ごそうかと考えている**

警察は彼女にアパートから物を集めるように5分間の猶予を与えた。

「本当に手当たり次第、いろいろなものを手に取りました。オートミールをつかんだり... 本当に混乱していました」

全米の学生デモ参加者は、道徳的かつ肉体的な裏づけを持った真の勇気というもの示しているが、多くは停学や退学に直面している。そのこと自体、この国でいちばん重要な教育機関にとって大変な恥辱だ。

彼らが危険なのは、キャンパスライフを混乱させたり、ユダヤ人学生を攻撃したりするからではない。そもそも抗議している人々の多くはユダヤ人なのである。彼らが危険なのは、民主主義国家たるアメリカが、究極の犯罪であるジェノサイドを止められない現実を露呈しているからである。

この学生たちは、私たちと同じように、イスラエルによるパレスチナ人虐殺のライブストリーミングを見ている。しかし、私たちの多くと異なるところがある。彼らは見ただけでは終わらない。彼らは行動する。彼らの声と抗議は、私達を取り巻く道徳的破綻に対する強力な警告なのだ。

イスラエルによるガザの全大学破壊を糾弾した学長は一人もいない。即時かつ無条件の停戦を求めた学長は一人もいない。「アパルトヘイト」や「ジェノサイド」という言葉を使った学長は一人もいない。イスラエルへの制裁やイスラエルからの離脱を求めた学長は一人もいない。

代わりに、これらの学術機関のトップは、裕福な寄付者、兵器メーカーを含む企業、そして熱狂的な右翼の前に、ひたすらひれ伏すのである。

彼らは、何千人もの子どもを含むパレスチナ人が日々殺戮されていることよりも、ユダヤ人への被害を中心に議論を組み替えている。彼らは、シオニスト国家とその支持者である。それが、自分たちを被害者として描くことを許しているのだ。

反ユダヤ主義に焦点を当てたこの偽りの物語は、メディアを含む権力の中核が、大量虐殺という真の問題を遮断することを可能にする。それは議論を汚染する。それは "反動的虐待" の典型的なケースである。彼らはパレスチナ人が長引く虐待に反応し、抵抗しようとする、突如として被害者に変身する。

プリンストン大学は、全米の他の大学と同様、大量虐殺の終結を求める野営を止めさせようとしている。それは、あたかも全国協調的な取り組みのようにみえる。

### ワナを準備して待ち構えた大学当局

大学側はこの野営計画を事前に知っていた。今朝、学生たちが5カ所の野営地に到着すると、大学公安部とプリンストン警察が大挙して出迎えた。ファイアストーン図書館前の野営予定地は警察で埋め尽くされていた。学生たちが大学の電子メールに予定を書き込まず、クローズされたサイトに拡散していたにもかかわらず、大学側には筒抜けだったのである。

今朝、警察に混じって立っていたのは、プリンストンのチャバド・ハウスを設立し、代表を務めるラビ、エイタン・ウェッブだった。学生活動家によれば、彼は大学のイベントに出席し、大量虐殺の終結を求める人々を反ユダヤ主義者として声高に攻撃しているという。

約100人のデモ参加者がスピーチに耳を傾けていると、頭上をヘリコプターが音を立てて旋回した。木に吊るされた横断幕にはこう書かれていた。

「ヨルダン川から地中海まで、パレスチナは自由になる」

学生たちは次のように述べた。

プリンストン大学が、ガザにおける「イスラエル国家の進行中の軍事作戦から利益を得る、あるいはそれに関与する」企業から手を引くまで、我々は抗議を続ける、

さらに、国防総省から資金提供を受けている「戦争兵器に関する」大学の研究を中止し、イスラエルの教育機関に対する学術的・文化的ボイコットを実施し、パレスチナの学術・文化機関を支援するよう求める。そして、即時かつ無条件の停戦実現を提唱する。

しかしすでに、今朝2人の逮捕者が出た時点で14のテントが撤去された。もし学生たちが再びテントを建てようとするれば、全員が逮捕されることは間違いなさそうだ。

古典学の博士課程に在籍するアディティ・ラオは言う。「当局のやり方は、私が予想していたことをはるかに超えています。野営を始めて7分後には逮捕が始まっていました」

## 脅迫

プリンストン大学のロシェル・カルフーン・キャンパスライフ担当副学長は、学生たちに大量の電子メールを送りつけた。そして「学生たちが野営をした場合、逮捕され、キャンパスから追い出される可能性がある」と警告した。「野営、占拠、その他の不法な破壊行為に関与し、警告後もやめようとしなければ逮捕され、即座にキャンパスから追放される」

学生にとって、このようなキャンパスからの排除は、学期を修了する能力を危うくする。学生は、停学または退学処分となる可能性がある。

シヴァリンガムは教授の一人に偶然会い、抗議活動への教員の支援を懇願した。教授は答えた、彼はテニユア（終身在職権）の期限が迫っており、参加できないとのことだった。彼が教えているのは「エコロジー・マルクス主義」という科目である。

シヴァリンガムは言う。「異様な瞬間でした。前学期は、社会変革の思想や人類の進化、市民社会の変革について考えていたのに...」。彼女は泣き出す。

午前7時数分過ぎ、警察はテントを張っている学生たちに ビラを配布した。その見出しは "プリンストン大学への警告及び立ち入り禁止の通告" と書かれていた。

「学生たちは、プリンストン大学の敷地内で、大学の規則や規定に違反し、他人の安全や財産を脅かし、大学の通常業務を妨害する行為を行っている。それには、野営への参加や大学行事の妨害が含まれる」。さらに、「禁止行為」を行った者は「ニュージャージー州刑法における反抗的不法侵入者」とみなされ、「即時逮捕の対象となる」と書かれていた。

### ハッサン・サイドの場合

数秒後、シヴァリンガムは警察官が "あの2人を捕まえる" というのを聞いた。パキスタン系で経済学の博士課程に在籍するハッサン・サイドは、シヴァリンガムと一緒にテントのひとつに入っていた。

彼は手錠をかけられていた。シヴァリンガムは結束バンドできつく縛られ、手の血行が絶たれた。彼の手首には今でも黒いあざがある。

「最初に警官から "不法侵入だ" とか "これは最初の警告だ" というような叫び声がありました。周りがうるさかったので、あまり聞こえなかった。そのあと突然、両手を背中に回されました。右腕が少ししびれて、ふりほどこうとしたら『そんなことをしたら逮捕に抵抗することになる』と言われた。そして彼らは手錠をかけました」

逮捕した警官の一人に、彼は学生かと尋ねられた。学生だと答えると、すぐに出入り禁止を言い渡された。「私に聞こえた限りでは、どのような罪状なのかについては言及されていません」と彼は言う。「私は1台の車に連れて行かれました。体を探られました。学生証の提示も求められました」

サイドはシヴァリングムと一緒にキャンパスパトカー後部座席に寄せられた。彼は警察にシヴァリングムの結束バンドを緩めてくれるよう頼んだ。その作業には数分かかった。ハサミではプラスチックを切ることができなかった。彼らはワイヤーカッターを見つけなければならなかった。彼らは大学の警察詰め所に連行された。

サイドは携帯電話、鍵、衣服、バックパック、イヤフォンを剥奪され、留置場に入れられた。誰も彼にミランダ権（黙秘権など容疑者の権利）があるを告げなかった。彼はまた、キャンパスへの立ち入りを禁止すると告げられた。「それは強制退去ですか？」と尋ねたが答えはなかった。

彼は弁護士を呼ぶよう頼んだ。警察の準備ができたなら弁護士を呼ぶと言われた。「不法侵入について何か言われたかもしれないが、はっきり覚えていない」と彼は言う。

彼は精神的な健康状態や薬を服用しているかどうかについての書類に記入するように言われた。そして、"反抗的不法侵入"で起訴されると告げられた。

彼は言った。「私は学生です。私はこの学校に通っています。どうして不法侵入になるんですか？」。彼らは本当に良い答えを持っていないようだった。

「私はキャンパス内に住んでいる。私が住居から追い出されることが“強制退去”にあたるのか」と再度尋ねた。彼らはただ「キャンパスからの追放」(ban from campus)と言うだけだった。「質問の答えになっていない」と言いました。彼らは文書ですべて説明すると言う。

「で、誰が文書を書くんだった？」。彼らは「大学院の部長だ」と答えた。

サイドはキャンパス内の宿舎まで車で送られた。キャンパスポリスは彼に鍵を持たせなかった。彼は携帯電話の充電器などを手にするのに数分与えられた。そのあと彼らはアパートのドアに鍵をかけた。

そして彼もまた、スモール・ワールド・コーヒー店に避難している次第だ。

## 故郷 インド・タミル・ナードゥ

シヴァリンガムは夏休みになると、よく生まれ故郷である南インドのタミル・ナードゥ州に戻った。そのたびに貧困と、生きるために日々奮闘する周囲の人々の姿に、彼女は胸が締め付けられる思いがした。

「私の人生と彼らの人生の格差、同じ世界に存在するそれらのものをどう調和させるか。私にとって、それはいつもとてもチグハグなことでした。不平等に取り組むことへの私の思いは、そこにあると思います。米国人以外の人々を人間として、命と尊厳に値する人間として考えることができるようになることが今の目標です」

。

そして彼女は今、キャンパスから追放されることに適応しなければならない。

「寝る場所を探さないといけないし、両親にも話さないといけない。でも、それはちょっと先の話になりそう。そして、刑務所収容者の救援や連携に参加する方法を見つけなければなりません。私はその場にいることはできないけれど、なにかの行動を起こすことはできるのだから」。

アメリカの歴史には恥ずべき時代がたくさんある。私たちが先住民族に対して行った大量虐殺。奴隷制。労働運動に対する暴力的な弾圧により、数百人の労働者が殺害された。リンチ。ジムとジェーン・クローウ。ベトナム。イラク。アフガニスタン。リビア。

私たちが資金を提供し支援しているガザでの大量虐殺は、その規模が非常に巨大であるため、この犯罪の殿堂の中で重要な位置を占めることになるだろう。歴史は私たちのほとんどにとって優しくないだろうが、これらの学生たちを祝福し、尊敬するだろう。

筆者のクリス・ヘッジズは、ピューリッツアー賞を受賞したアメリカのジャーナリスト。ニューヨーク・タイムズの中東支局長などを務めた。（コンソーシアム・ニュースの紹介）

【翻訳チェック・鈴木頌】